

〈特別活動〉

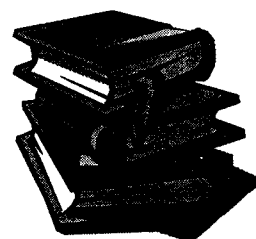
テーマ

一人ひとりが生き方を考える進路指導の工夫・改善 ～ディベートを通して～

宜野湾市立嘉数中学校 教諭 岡 幸枝

目 次

I テーマ設定の理由	27
II 研究の仮説	27
III 研究の全体構造図	28
IV 研究内容	28
1 進路指導	28
(1) 沖縄県の進路指導の現状と課題	28
(2) 進路指導の定義・目的	29
(3) 生き方の三つの様相	30
(4) 自己実現	31
(5) 課題に挑戦する力	32
(6) 小・中学校の進路指導の連携	32
2 ディベート	33
(1) ディベートとは	33
(2) ディベートで身につく力	34
(3) 意思決定とディベート	34
(4) 論題設定の留意点	34
V 実践資料	35
1 題材	35
2 指導の目標	35
3 題材設定の理由	35
4 ディベートまでの準備	37
5 本時の指導略案	38
6 授業の検証	40
VI 成果と課題	44
進路指導としてのディベートの成果と課題	44
ディベートを通しての副次的な効果	44
学級活動の副次的な効果	45
1 研究を終えるにあたって	45
2 主な参考文献	45
3 資料	45



一人ひとりが生き方を考える進路指導の工夫・改善

～ディベートを通して～

宜野湾市立嘉数中学校 教諭 岡 幸枝

I テーマ設定の理由

平成 14 年度からの新学習指導要領の全面实施を控え、中学校の各教科は移行期間に入った。しかし、特別活動と、道德の二領域は、新指導要領の趣旨をできるだけ早く学校現場で生かすという観点から今年度（平成 12 年度）からの実施となっている。その趣旨は、全課程を通して生徒に人間としての生き方の自覚を促し、深めていく指導の充実を図ることである。

現代は社会のモラルや規範がゆるみ、個人に対する外部からの抑圧がなくなりつつある。このような状況で他者への思いやりや、社会の中での自己実現の方向性などを一人ひとりが考えて行動することが求められている。

また、うまく社会に適応できない人も増えている。引きこもりや、自分の感情を表現できずに暴力に訴えてしまう人。少年非行の低年齢化も進み、人の命を奪ってしまうほどの凶悪な犯罪が後を絶たない。また、一般に大人と認められる年齢に達してもやりたいことが見つけられない若者も増えていると言われている。

進路指導は、学校全体で、計画的・継続的に行うことが必要である。それは、三年生での進路決定の前に自分の人生をどう歩みたいのかをゆっくり考える時間が必要不可欠だからである。

しかし、私自身の進路指導を振り返ってみると、真剣に生き方を考えさせるような機会を設定していなかったように思う。教師による簡単な説明や、形だけの調べ学習になってしまっていたのである。

進路指導が上手にできる先生のクラスは問題行動も少ないと言われる。それは自分自身の中に不安や葛藤を抱きやすい中学生が、将来自分の進むべき道を真剣に考えることで、心を整理し、日々

努力することができるようになるからではないだろうか。

そこで変化の激しい社会の中で、生徒が主体的に生きていくための素養を育て、支援していくための方法や、教師としての関わり方を考えたいと思いこのテーマを設定した。

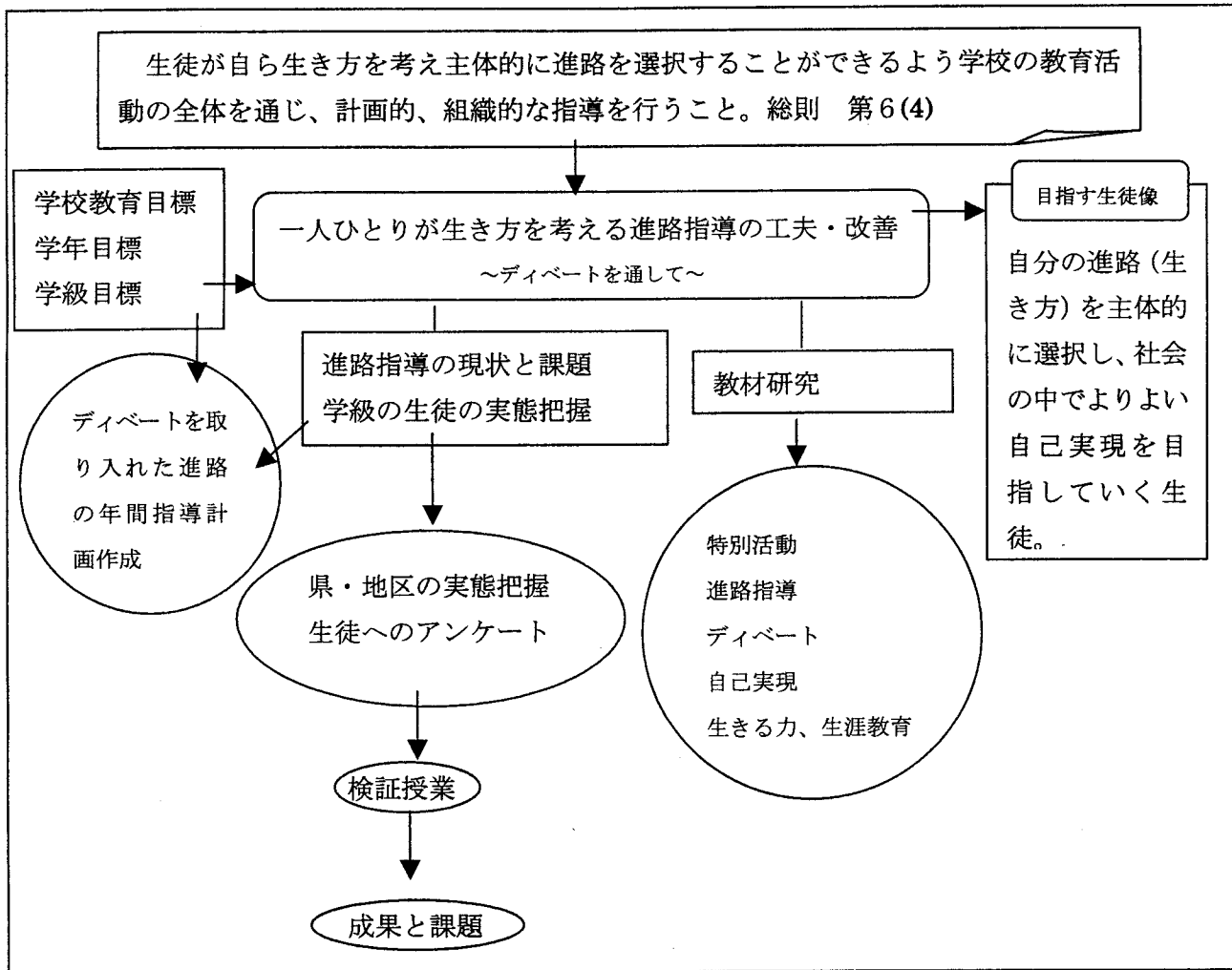
II 研究の仮説

自己実現や生き方を考えるために、まず自己理解と、他者理解が必要であると考えている。

両方を効果的に進め、さらに学級を望ましい集団へと組織していく方法の一つとして話し合い活動がある。話し合い活動にはさまざまなタイプがあるが、その中で今回はディベートに着目し、以下の研究仮説を立て、課題に迫ることにした。

- 1 ディベートは形式が決まっているので必ず対立意見を出すことができる。また、勝敗があるため、意見交換が活発になされるだろう。
- 2 ディベートを通して、一方的な見方でなく、多面的な思考が育つだろう。（複眼的思考）
- 3 相手と自分の考え方の相違に気づき、相互理解が深まるとともに、自己理解も深まるだろう。
- 4 ディベートを通して進路や生き方についての認識が深まるだろう。

Ⅲ 研究の全体構造図



Ⅳ 研究内容

1 進路指導

(1) 沖縄県の進路指導の現状と課題

『学校教育における指導の努力点』（平成12年度）をもとに、沖縄県の進路指導＝生き方への指導援助のあり方について、現状と課題を考えたい。

① 不登校、学校不適應の現状

平成9、10年度の統計によると、県内の不登校の発生数は、小学校で平成9年度207件、平成10年度には404件へ（197件）増加している。

中学校では、平成9年度1,121件から平成10年度には1,531件へ（410件）増加している。

また、同一集団の不登校の状況を見てみると、学年が進行するにつれて新たな不登校者の増加があるという。

不登校に陥った直接のきっかけ（平成10年度）

を見てみると、小学校で一番多かった理由は本人にかかわる問題で26,2%である。次に親子関係をめぐる問題で17,8%となっている。

一般に、小学生の時期は親に依存し、精神的にも身体的にも安定していると言われる。その時期に、何らかの原因で親との間に深刻な問題や葛藤が起こった場合、精神的に不安定になり、学校生活にも支障をきたすようになるのではないだろうか。

また、不登校時の児童の状態は、小学校では不安など情緒的混乱型が28,2%で一番多く、次が多いのは複合型⁽¹⁾25,2%となっている。

中学校の場合、不登校に陥った直接のきっかけで一番多いのは本人に関わる問題25,1%である。次に学業の不振22,3%となっている。不登校時の

(1) いろいろな要素が複雑に絡み合って分類できないケース。

生徒の状態が一番多いのが、あそび・非行型で 41,4%である。次に多いのは無気力型で 17,5%である。

中学校三年間の間には、保護者からの心理的な独立の欲求が高まり、身体の発達（第二性徴の出現）も著しくなり、心身ともに不安定な状況に置かれることとなる。また、学校生活も小学校までとがらりと変わり、戸惑うことも多いだろうと考えられる。このような時期に、よき理解者である友達と出会えず、学級に心の居場所ができない場合不登校に陥ってしまう可能性が高くなるといえる。

表－１ 不登校発生件数の推移と不登校時の状態

	小学校	中学校
不登校 件数	H9 年度 207 件 H10 年度 404 件	H9 年度 1,121 件 H10 年度 1,531 件
不登校 の様子	①情緒的混乱型 (28.2%) ②複合型 (25.2%)	①あそび・非行型 (41.4%) ②無気力型 (17.5%)

このような不登校の状況が改善されなければ、中学校卒業時まで、社会の中でよりよい自己実現を目指すための知識や技能、態度を身に付けさせることは難しい。

また平成 11 年度の中頭地区の卒業生の進路状況を見てみると、2,8%が無業者であり、5,7%が高校を浪人している。卒業生の 8,5%が現在不安定な状況に置かれている⁽²⁾といえる。

だが卒業時に、不安定な状態（身分がはっきりしない状態）であっても、本人が自覚し、塾へ通う、就職する、アルバイトを始めるなど、目的や目標を持って社会と関わり生活しているのであればそれほど心配はないと考えている。しかし、本人が無気力な状態から抜け出せない場合、または遊ぶことに夢中になり、無目的に日々を過ごしている場合、教師の適切な指導・援助が必要ではな

いだろうか。

しかし、学校の現状は目の前の生徒に関わることに精一杯で、卒業生のことが気になっても、なかなか追援助指導を行うことは難しい。

では、学校以外に不安定な状況にある生徒に積極的に関わる、または生徒たちが頼っていける施設や何らかの機関があるかという、県内ではまだ十分とは言えず、社会的にも放置されている状況であると言える。

② 高校中途退学者の増加

全国的に、高等学校の中途退学者の増大が問題視されている。なかでも沖縄県の中退率は 3,3%で全国でもワースト 1 である。

平成 10 年度は県内公立の高校で 1,776 人が中退しており、その半数以上が 1 年生であった。

また、事由別退学者数を見てみると、一番多いのは進路変更で全体の 57,9% (1029 人) を占める。ついで、学校生活・学業生活不適応が 21,9% (389 人)、学業不振が 6,8% (120 人) と続く。⁽³⁾

進路変更でこれだけの生徒が学校を辞め、進路を選び直していることから、進路決定までにどれだけ本人が進路について考えたのか。また、その決定は本人自身のものであったのか。さらに、高校生活の実態をどれだけ生徒が把握していたのかという疑問が出てくる。例えば、本人は勉強と部活動の両立を目指して進学したが、ある高校では部活動が厳しく規制され、活動が制限されている。そういった高校生活の実態を教師も生徒ももっと知る努力をしなければならない。

(2) 進路指導の定義・目的

① 進路指導とは

生徒が自ら生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう学校の教育活動の全体を通じ、計画的、組織的な指導を行うこと。

総則 第 6 (4)

とある。教師はさまざまな教育活動の場面を通し

(2) 平成 11 年度卒業生の進路状況調査より。

(3) 別紙 3 資料 参照。

て、生徒の能力や技能を育成していく。そのためには、個人個人の発達がどの段階にあるのかを把握し、教師がどの面を伸ばしていきたいかという目標を持つことが大切であると考え。

また、目標をどこにおくか考える時には教師の一方的な視点でなく、保護者との連携が大切である。教師と保護者が連携することは、生徒の希望を中心に据えて、どのような援助や支援ができるかをともに考えていくことである。そのためには、教師の進路指導に対する考えを学級通信で発信したり、学級 **PTA** を通して親に伝える工夫が必要である。また、保護者の意見を受け取るためには、アンケートを実施し意見交換ができるように工夫したい。(図1)

② 進路指導で目指すもの

生き方を考え、主体的に進路を選択する力を育てることは一朝一夕にできることではない。日々の学習の中で基礎的な学力を培いながら、一方で進路について考える機会と、場面を与え、生徒の心の中で熟成されるまで待つ時間が必要だと考える。

また、意思決定の場面を設定し、そこに至るまでの具体的な方法を経験させることも必要であると考えている。

生徒の個人個人の願いを育て、生きる力を育成することは方法一つをとっても広く深い。だからこそ、教師は、進路＝生き方を教育の全体を通じて、計画的に継続して指導していくのだという自覚を持つことが重要であると考え。

つまり進路指導は、生徒がよりよい自己実現をめざして生きていけるように全教師で助け、励ます指導・支援だといえる。

(3) 生き方の三つの様相

生き方には三つの様相があるという。どの生き方をどの場面で生徒と共に学ぶのかを教師が考え、指導計画に組み込んでいくことが重要である。

①「生き方＝方法」 生活リズムが安定し、規則正しい生活ができているとき「あの生徒はよい生き方をしている」といいます。生活技能や基本的な生活習慣や実践行動に関わる側面です。この場合の「方」は「方法」「技法」の意味をもっています。

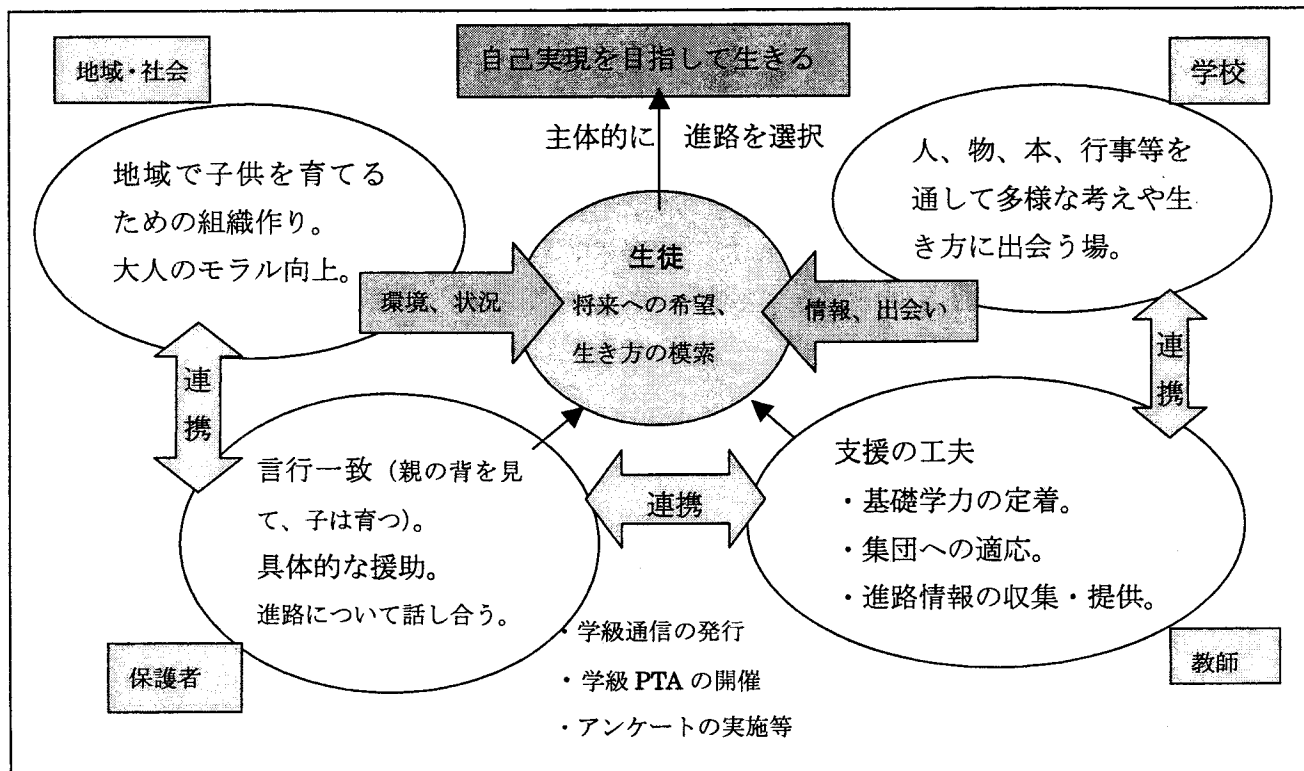


図1 進路指導とは

②「生き方＝型」考え方や生活態度に一貫性があり、信念のある生活ができているとき「あの人はすばらしい生き方ができている」といいます。生きることについての考え方や態度に関わる側面で、この場合の「方」は「型、個性」の意義をもっています。

③「生き方＝方向」人間は常に自己の身体と精神を調和的に発展させながら、よさ（真・善・美・聖）を求め、よりよく生きることをめざしています。よき生き方を求め続けていくという意味で、この場合の「方」は「方向、理想」という意義があります。⁽⁴⁾

それぞれの教科で育成する生きる力を生かすためには、学校教育の全体を通じて、人との出会いや日々のできごとを受け止め、どんな状況でも周囲と協力して、生きていく力を育てることだと考えている。

自分を信じ、周りの人を信じて互いに関わろうとする姿勢を育てることが、進路指導で育成しようとする生きる力だと考えている。

(4) 自己実現

① 自己実現とは

自己実現を何らかの終着点と考えると、私たちの一生はその時々を積み重ねていくことだと考えられる。だが、自己実現を終着点ととらえるのではなく、一生涯かけて努力しつづける過程だととらえるならば、一人ひとりの目標は、先のようにとらえた場合と全く違ったものになってくると考えられる。義務教育の最終段階であり、また青年期の入り口に立った中学生と一緒に生き方を考えるとき、私は後者のように自己実現をとらえたい。

人は誰でも、生きている限り自己実現の欲求を持っている。しかし、学校の中で自分が何をしたいのかを考える前に、点数で価値を判断されてい

るように感じ、生きる意欲を見出せずに、なんとなく過ごしている生徒がいる。「今さえ楽しければそれでいい。」「先のことを考えると不安になるから、今は考えたくない。」という生徒たちである。自分に自信をなくしかけている子どもたちにどのように関われば、生きる力を育てられるのだろうか。それを追求することが進路指導で目指すものだ考える。

② 自己実現の段階

自己実現を目指す生徒を育てるには段階的な指導が必要である。最初に自己受容があり、自己理解が深まり、自己指導力を高めることで自己実現をめざす生徒へと変容していくからである。⁽⁵⁾

ア 自己受容

自己受容は、生徒が自分の良いところも悪いところも全て自分であると認める心の動きである。生き方を考えるとき、今現在、自分の生きている現実を全く無視することはできない。自分が置かれている環境（人間関係、特に保護者、家族との関係）を見つめることから自己受容の芽は育つのではないだろうか。保護者からの心理的な独立を求め始める時期に、家族の生き方を自分の立場から見つめなおすことは、自分と家族一人ひとは違う人間なのだという事実を再確認し、心理的な独立が促進されると考える。また、家族のあり方や、それぞれの生き方を生徒間で話し合うことは世の中のさまざまな生き方を肌で感じるようになるとともに、普段知りえなかった友の一面を知ることになる。生徒の状況や心理状態に配慮が必要だが、家族について考える時間を設定し、自己受容を促進させたい。

イ 自己理解

自己理解は、自分がどういう能力や可能性を秘めているのか、自分の持つ職業面の適性はどのようなものかを考え、知ることである。

⁽⁵⁾ 坂井貞夫「職業指導、進路指導での子どもの自己実現の意味」前掲書 PP. 138-139。

⁽⁴⁾ 橋本定男「学級活動の『生き方』指導と道徳の時間の『生き方』指導の違い」『教職研修 実践ハンドブック 児童・生徒の「生き方」指導の展開』教育開発研究所 8月増刊号 1994年 PP. 96-97。

ジョハリの窓^⑥でいわれるように、人間には四つの面がある。他者から見えている自分を知るためには、他者からの働きかけがなくてはならない。そのような機会を学級活動や道徳の時間に計画的に設定し、自己理解を深めたい。自分の知っている自分と他者の知っている自分とのギャップを感じることができれば、周囲の人に対しても一面を捉えるのではなく、多方面から見ようとする態度が育つと考える。

ウ 自己指導力

自己指導力とは、「幾つかの選択肢の中から、主体的に自分の意志で判断し、選択し、責任を持って実行する能力」^⑦である。

自己指導力を育てるためには、自ら計画し、実践し、結果をもとに反省する過程を経験させなければならない。学校行事への取り組みなど方法を工夫すれば生徒の自己指導力を育てる絶好の機会である。教師が、生徒の自己指導力を高めるのだという視点で行事などへの取り組みを考えたい。

(5) 課題に挑戦する力

人は毎日、意識的に、または無意識に大小さまざまな選択・決定をしている。ある目標や課題の選択・決定は、その個人の原因帰属のしかたで違ってくるという。

ロッター^⑧は「統制の位置」という概念を生み、成功・失敗の原因を自分自身の内面(能力や知識、技能など)に求め、自分が状況をコントロールしていると考えた場合を内的統制といった。また、成功・失敗の原因を自分自身ではなく、他人の援助の有無や、課題の難易度、運不運に求め、外側の条件が自分に起こる出来事をコントロールしていると考えた場合を外制的統制といった。これにワイナー^⑨は、原因の安定性と変動性の観点を付け加えた。(表-2)

子どもが行動を起こすときには、何らかの変化を期待している。しかし、環境に何の変化も起こらない、または望んだ結果と違う結果を得た場合、無気力な状態に陥ることがある。だが、無気力な状態が慢性化するか、そうでないかは統制の位置に関係する。

表-2 成功や失敗の認知の決定要素

宮本美沙子『やる気の心理学』1990年 創元社

		統制の位置	
		内 的	外 的
原 因	安 定	能 力	課題の困難度
	変 動	努 力	運

たとえば、失敗の原因を努力の仕方が悪かった、と内的で変動するものに求める場合、努力の仕方を変えれば何とかなると考えるので、次の課題に挑戦する力が生まれる。しかし、課題の困難度や運など外的なものに失敗の原因を求めると自分ではどうしようもないと考え、無気力な状態に陥りやすい。自己を受容し、よりよい自己実現を目指していくためには、生徒が持っている帰属の意識を内的統制の方向へと向けることが必要である。原因を自分自身の内面に求めるようになれば、たとえ失敗したとしてもまた新たな課題へと挑戦する力が生まれると考えるからである。

(6) 小・中学校の進路指導の連携

進路指導を計画的・継続的に行い、内容を深めるためには、小・中学校の段階でそれぞれどのような進路に関する指導が行われているのかを考える必要がある。

①小学校段階での進路に関する指導

小学校の指導要領の中には、進路指導という言葉がなく、その位置付けは明確ではない。しかし、児童生徒の一人ひとりの夢と希望を育むためには、小学校の段階から生き方について考えさせるような場面の設定が必要である。

小学校指導要領の特別活動、A学級活動の(2)

⑥ 対人関係における気づきの図式モデル。

⑦ 坂井前出の資料より引用。

⑧ Rotter, J. B. (1966)。

⑨ Weiner, B ; (1971, 1972, 1974,)。

には次のように述べられている。

(2) 日常の生活や、学習への適応及び健康や安全に関すること。

希望や目標を持って生きる態度の形成、基本的な生活習慣の形成、望ましい人間関係の育成、学校図書館の利用、心身ともに健康で安全な生活態度の形成、学校給食と望ましい食習慣の形成など

小学校は、心身の発達段階に応じて、適切に目標が設定されることが大切である。低・中・高と学年ごとに三段階に分け、ア自己理解、イ進路計画・選択、ウ職業観・勉学観、エ進路情報の四つの観点で系統的に進路指導を計画すると次のようになるという⁽¹⁰⁾。

小学校の低学年では、大きくなったら何になりたいか(ア、イ)、自分のよさを知る(ア、イ)家族の仕事を知る(ウ、エ)。

中学年では、将来への夢(ア、イ)、身近にある職業を知る(ウ、エ)、自分の特徴や得意なものに気づく(ア、イ、ウ、エ)。

高学年では、将来のつきたい職業(ア、イ)、いろいろな職業を知る(ウ、エ)自分の長所を生かす(集団との関わりの中で)(ア、イ、ウ、エ)となっている。

小学校の行事や日常生活の中で、教師が上の系統を意識して指導や援助を行うことは、中学校の進路学習に自然に取り組める心の準備につながる。

②中学校の段階での進路指導

中学校は、義務教育の最終段階として進路指導の重要性が明言されている。前出の資料から、中学校の系統的な指導を抜き出してみると次のようになる。⁽¹¹⁾

中学校一年生では、将来の夢(イ)、自分を知る(ア)、働く人々(ウ、エ)、将来の希望と進路指導(イ)。

中学校二年生では、働くことと学ぶこと(ウ、エ)、職業の世界(ウ、エ)、学ぶための制度と機会(ウ、エ)、適性と進路(ア、イ)。

中学校三年生では、実際の進路選択・決定に向けて、進路の選択に備えて(ア、イ、ウ、エ)、進路の決定(ア、イ、ウ、エ)、将来の準備(ウ、エ)となっている。

現在、高校への進学率は90%を超えている。だが、学歴ほしさに高校へ進学する生徒もいる。また、中学校卒業後、すぐに社会に出て働く生徒もいる。よって進路指導の中でも、職業観・勉学観の育成や、さまざまな職業を知ること、また、社会に出てからも学ぶ制度や機会があることを知することは生徒が主体的に進路を決定する際、選択肢を持って選択・決定するために必要である。生徒が自分の道を選べるように、教師は変わりゆく社会にアンテナを張り、情報を集める必要がある。また、生徒の選択肢を広げるための手立てを探していくことも必要である。

2 ディベート

(1) ディベートとは

ディベートはあるテーマに対して肯定側と、否定側に分かれ、根拠に基づいて自分たちの意見を主張する。その主張に対して、質疑応答などを行い、最終弁論を聞いた第三者によって勝敗が決まる。

中でもスピーチや討論の技術を高めることに重点を置き、練習を重ね、試合で勝敗を競うためのディベートを競技ディベートという。しかし、特別活動は、望ましい学級集団作りを基礎とする。したがって、特別活動の一環として行う場合、競技ディベートとは違う目的を追求することになる。それは、互いに論争する中で、相手を受け入れたり、自分の意志を確認したり、全体でそのテーマに関する認識を深める手段の一つとしてディベートを行うからである。

(2) ディベートで身につく力

ディベートの特徴上、一般に次のような力が育つと考えられる。

⁽¹⁰⁾ 那覇市立与儀小学校 石川 博久「小学校・中学校における進路指導系統図」『平成12年度 短期研修 特別活動実践講座 実践報告書』P. 3。

⁽¹¹⁾ ア～エの項目は小学校の四つの観点と同じ。

- ①情報収集の力、情報の取捨選択の力、それらをまとめて新しい情報を創造する力。
- ②論理的な思考力。
- ③相手の話を聞く、書き取することを基礎とした理解力。
- ④プレゼンテーション能力。
- ⑤自分の考えをいろいろな角度から見つめる複眼的思考力。
- ⑥立論をするためには、証拠を集めなければならない。証拠を集める過程では自分の予期しない情報も集まる。その副次的な効果としての視野の広がり。
- ⑦対立意見を言い合う経験をすることにより、ディベート以外の話し合いや、交流の場面でも人と違う発言をすることを恐れなくなる。
- ⑧自分と違う考え方を冷静に受け止め、客観的に判断する練習ができる。

等である。これに進路指導では、

- ①進路選択の可能性の認識が今までの考え方より広がる。
- ②生き方についての認識の深化、発展が期待できる。

の二点を付け加えたい。討論の場面で意見の対立が激しくなれば、なぜ、このような違いが生じるのか、正しい意見はあるのか、という意識を持つ生徒もいるだろう。このような意識を持つことは、生き方を考え、中学生が自分と他者、個人と社会のかかわりを考える視点につながっていくと考える。

(3) 意思決定とディベート

人は一生、選択を迫られ、さまざまな場面で意思決定を行っている。意思決定に必要な考える力には二つあるといわれている。それは「直感的に考えること（直感的思考力）」と「論理的に考えること（論理的思考力）」である。⁽¹²⁾

直感的思考力は生まれつきの部分もあるが鍛え

られるという。また論理的思考力は、分析的な思考であるため最初は決定までに時間がかかる。しかし、普段突き詰めて考えることが難しいテーマを論題とし、訓練するうちに思考時間が短くなり、とっさの意思決定ができるようになるという。意思決定の時間が短くなれば、直感的思考力も高まるというのである。

ディベートでは、論題の決定、立場の決定、資料・データの収集、論理の再構築、討論、第三者による判定という道筋をたどる。課題を意識し、データによって自分の主張を再構築する過程では自分の論理を客観的に見つめる作業が入る。ここで、自分の最初の論理を修正しなければならない場合もある。しかし、この過程を経て再構築された論理は事実裏付けられた信頼できるものとなる。その上、実際の討論ではこの論理が相手の論理とぶつかってまた新しい論理へと変化していく。このような過程をたどるところから、「ディベートをすることは意思決定のシュミレーションをすることだ。」⁽¹³⁾とも言われている。

生徒たちがディベートに慣れ、複眼的思考を身につければ、人生におけるさまざまな選択の場面で、多くの選択肢の中から、より正しい意思決定を行うことができるようになると思う。

(4) 論題設定の留意点

ディベートでは、論題が重要だと言われている。生徒が生き方に対する認識を深めるためには、生徒の中にある今の認識を揺さぶるような論題が必要である。生徒の認識を揺さぶるためには、

- ア テーマが大きな理論的対立を持つこと。
- イ 肯定も否定も説得力のある主張ができること。（簡単にどちらの側につくか、判断できないもの。）ということが論題の条件になってくる。

また、論題設定のときに考慮する点として、

- ① 発展性……生徒の認識レベルにみあいテーマについての認識を発展させられるか。
- ② 本質性……問題構造の中で本質的で重要な

⁽¹²⁾ 北岡俊明『ディベートがうまくなる法—議論・説得・交渉に勝つための技術—』PHP 文庫, 1997 年。

⁽¹³⁾ 北岡俊明『意思決定ディベートの技術—ディベートが組織を活性化する—』中央経済社, 1995 年。

部分か。

- ③ 時事的話題性……社会的に高い関心があつて論争されているか。

という点が挙げられる。

論題は形式によって、価値論題、事実（推定）論題、政策論題と分けられることが多い。進路のディベートは、全員で話し合う中で、私の意思や判断を決める討論である。したがって、進路のディベートの論題は、価値論題である。ちなみに、事実論題は「第三者の状態を考察する」問題、政策論題は「われわれ全体の意思を決める問題」⁽¹⁴⁾であるという。

V 実践資料

日時 平成 12 年 7 月 5 日(水)6 校時

対象学級 嘉数中学校 2 年 1 組

(男子 20 名 女子 18 名計 38 名)

- 1 題材 「進路の選択は今の実力より、自分の夢や希望を優先すべきである」

2 指導の目標

- (1) 自分の夢を持ち、努力することの大切さがわかる。
- (2) 自分の進路選択の基準について考える。

3 題材設定の理由

(1)進路指導について

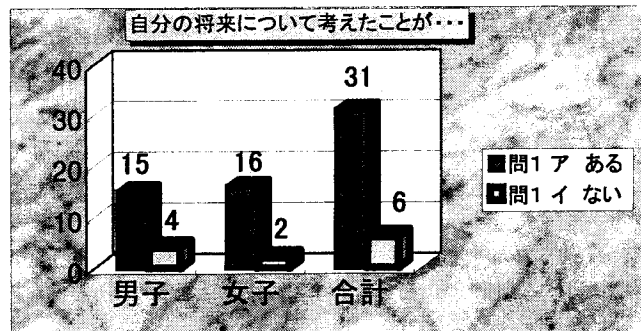
私たちが生きていくためには、その道標となる人生の目標と計画があったほうがよい。しかし、現在の進路指導の現状を見てみると、生徒も教師もなぜ進学するのか、この先、どのような人生を選択するのか、という問いかけをせずに、世間一般のレールに乗ること、乗せることを見つめているような気がする。

自分の希望と、現実のギャップはいつも必ずある。しかし、そのギャップにいつ気が付くか、また、気づいてから本人がどう行動するかによって、その結果はだいぶ違ったものになってくる。まだ

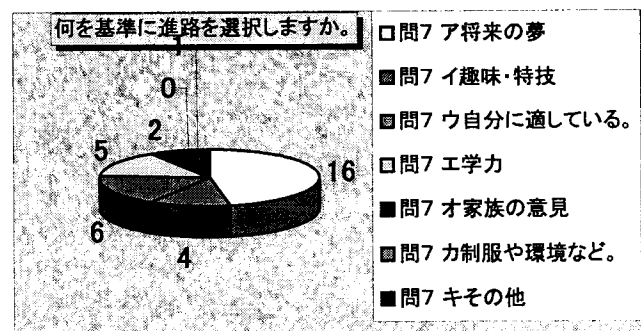
進路選択の意識が薄い中学 2 年生のこの時期に、夢を育てるコツと、夢を持つことの意味をみんなです話し合いながら考えることで、進路に対する意識を高め、2 年後には納得のいく進路選択をすることができるようになってほしい。

(2)生徒観

学級の生徒を対象に 5 月に進路の意識調査を行った。



37 人中 31 人 (83.8%) が自分の将来について考えている。しかし、「考えたことがない」、「そのときになれば何とかかなると思う」と答えた生徒が 6 人おり、自分の人生に対する関心が低い生徒がいることがわかった。



何を基準に進路を選択するかと聞いたところ、将来の夢が 16 人 (43.2%)、適性が 6 人 (16.2%) 学力 5 人 (13.5%) が上位を占めた。

(14) 杉浦正和・和井田清司編著『授業が変わるディベート術!』国土社、1998 年。

将来どのような暮らしがしたいですか？

ア一生懸命働き金持ちになりたい	1	2	3
イまじめに勉強して名をあげたい	0	0	0
ウ自分の趣味を生かした自分なりの生活	11	10	21
エのんきに暮らしたい。	5	2	7
オ清く正しく暮らしたい	0	0	0
カ自分のことを考え社会に奉仕しながら暮らしたい	1	1	2
キその他	0	3	3

男子も女子も半数が自分の趣味を生かした自分なりの生活がしたいと答えており、エの、のんきに暮らしたいとあわせると、28人(75.7%)があくせくすることなく、自分の望む生活を手に入れたと考えているようである。何のために働くのかという労働の意味や意義を考えさせる必要がある。

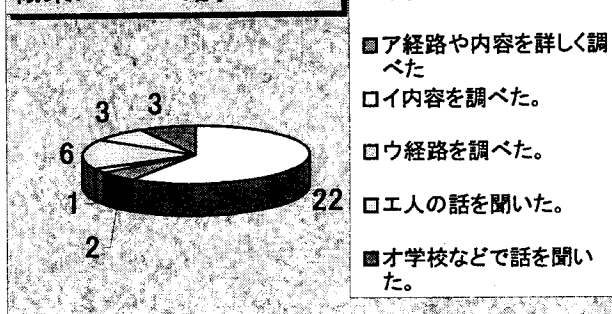
将来の職業について考えたことがありますか。

ア就きたい職業があり、努力しているので必ずなれる	0	0	0
イ努力しているがなれるかわからない。	5	10	15
ウ就きたい職業があるが努力していない。	5	4	9
エ就きたい職業があるが、なれないと思う。	2	1	3
オ就きたい職業があるが、あきらめた。	1	0	1
カまだ考えていない。	5	3	8
キその時になればなんとかなると思う。	1	0	1

先ほどの将来について考えたことがあるかという質問では、まだ考えていない、そのときになれば何とかなるは6人だった。しかし、職業についてとなると10人になり、4名増えている。進学については考えているが、職業についてはまだ考えていないということだろうか。

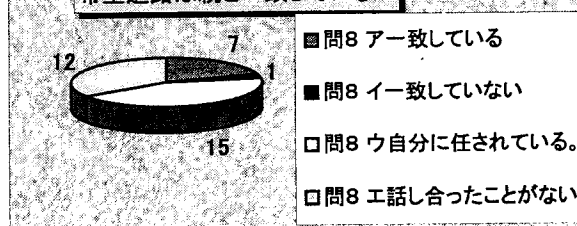
また、進路選択の基準を将来の夢と答えた生徒が16人いるが、実際に努力しているのは15人である。また、絶対になれるという強い信念を持っておらず、なれないかもしれないという消極的な考えを持っている。夢の実現のために今すべきことは何かを一人一人が自覚できる手立てが必要である。

職業について調べたこと



興味を持った職業について調べたことがあるか聞いたところ、22人(54.5%)の生徒が調べたことがないと答えている。

希望進路は親と一致しているか



また保護者と進路のことで話し合い、意見が一致している生徒は7人いる。しかし、話し合ったことがない生徒が12人いる。3年の進路選択に向けて親同士の情報交換の機会(学級PTAなど)を設け、保護者の意識も高める必要がある。

以上の状況を踏まえ、本時の論題は『進路の選択は、今の実力より、自分の夢や希望を優先すべきである』とした。事前のアンケートでは、36人中(欠席男子1、女子1)、

肯定派 23人(男子13人、女子10人) 63.9%

否定派 13人(男子6人、女子7人) 36.1%

であった。

それぞれ、なぜそう思うかときいたところ、以下ようになった。

肯定する理由

男子 ・夢(目標)に向かってがんばれるから。

・行きたくもないところに就いても面白くないと思ったから。

・自分にあつた学校じゃないと何をやっても面白くないと思う。

女子 ・成績も必要だけど、やっぱり希望を優先したい。

・成績がよくても夢や希望がなかったらやりたい仕

事でなくても、やらないといけなくなる。(面白くない。)

・希望は大きく持ってがんばる。

否定の理由

男子・希望だけでは生きていけない。現実を捉えることが大切。

・頭がよくないといけない高校があるから。

・両方しないとだめ。

女子・自分の希望を優先する前に成績がよくないとだめだから。

・成績がよくないと試験で合格できない。

・成績が悪かったら仕事できないから。

となっている。

肯定側が多く、努力することが大事だ、といいながらも、実際に努力しているか、という問に対しては、努力している 15 人 (41.6%) で学級の半数以下である。資料集めや、全体でのディベートを通して夢を持ち、努力することの大切さを一人ひとりが考えてほしいと思っている。

表－3 生徒に渡した予定表

(3) 授業の仮説

ディベートを経験することで次のような生徒の変容が期待できる。

①肯定も否定も最初の自分の感覚的な意見から、根拠に基づいた意見へと論題に対する認識が深まるだろう。

②作戦を練り、準備をすすめる中で進路について自然に話し合う雰囲気生まれるだろう。

③これまで進路についてあまり考えようとしなかった生徒たちも、準備や討論に参加することで進路に対する意識が高まるだろう。

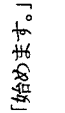
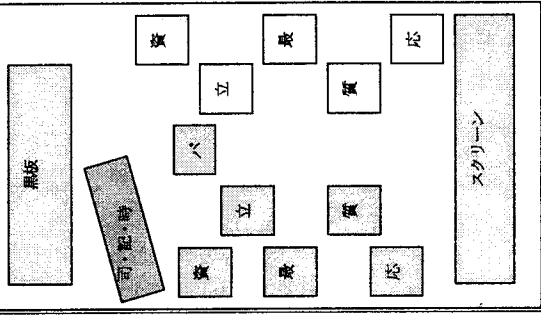
④討論で対立意見を聞きあうことにより、自分の考えの変容を体験するだろう。

4 ディベートまでの準備

今回、授業の時間内で予定を組むことができなかったため 45 分休憩、放課後の時間を利用して生徒たちと準備をすすめた。しかし、生徒の方にも都合があり、全体を一斉に指導することが難しく、全員にちゃんと取り組ませることができなかった。

2 年 1 組ディベート学習の流れ 平成 12 年 6 月 28 日～7 月 5 日			
総合司会 (1 人) 計時 (1 人) 記録 (3 人) ※ 5 人は準備期間中にディベート学習に向けての掲示物作成を行う。			
肯定側 (18 人)	班員	活動の様子	活動予定
立論班みんなからの根拠を基に、立論の準備発表。			6 月 29 日仮説を立てる。 7 月 1 日～3 日資料を基に立論。
資料作り班発表に向けて資料を作り、当日発表に役立てる。			6 月 30 日アンケート集計グラフ作成手順。7 月 1 日グラフ完成 (→立論班へ) 3 日・立論時のパワーポイント作成。
質問作成班相手チームに対する質問を 5 つ程度用意し、当日発表する。			6 月 30 日相手チームの立論予想。 1 日質問の仕方指導 (放課後)、作成。 3 日質問まとめ。4 日リハーサル
応答予想作戦班相手チームからの質問を予想し、答えを用意。当日応答する。			7 月 1 日質問の仕方指導時、一緒に指導。予想問題作成 3 日 質疑応答予想を最終弁論班へ
最終弁論班展開を予測し最終弁論を組み立てておく。(当日、原稿に修正を加える可能性大。)			6 月 30 日アンケートの集計、考察。(立論班へ) 3 日立論、質疑応答班の原稿に目を通し、流れをつかむ。4 日リハ

5 本時の指導略案

5 本時の指導略案					
時間	学習の内容と流れ	教師の働きかけ	生徒の活動	展開のポイント	留意点・資料
導入 (5分)	・はじめの挨拶 ・出席の確認 ・論議の発表 『進路の選択は、今の実力より、将来の夢や希望を優先させるべきである。』	教師：「今日は、みんなにディベートをしてもらいます。 ①相手の考えを理解しようという気持ちで聞くこと。 ②自分の考えもわかってほしいという気持ちで話すこと。 を心がけてください。」 司会：「最初に、ディベートの注意事項を確認します。… 以上の点を守って、ディベートを進めてください。」 司会：「進路の選択は、今の実力より、自分の夢や希望を優先するべきである。』のディベートを始めます。」	 ・各班ごとに席につく。《持ち物》 ・筆記用具 ・論議シート ・フアイル ・司会者の注意事項を聞く。 「始めます。」	・事前に班は決定しているの、どこに座るのかも打ち合わせておく。 ・準備が必要なので、1週間前までは論議も生徒に知らせておく。 ・論議シートは、各個人、班でまとめるが、事前に目を通しておく。 ・事前に班ごとに作戦タイム（教師と）を設ける。その際、予想される質問に対する応答の仕方や、論議などについて打ち合わせる。	・ディベートの時間配分 ・論議 ・ディベートの注意事項 ・デジタル・タイマー ・司会と計時係は1人ずつ。 ・司会の言葉 ・時間配分表を準備する。 ・記録係は3人おくこととする。
展開 (35分) 2分	1はじめのことば（注意事項の説明も含めて2分） 立論 各3分	肯定側立論 司会：「最初に、肯定側の立論を3分以内でお願いします。」	 「始めます。」	・肯定側と否定側が向かい合う形になる。 ・2つの班を3人で囲むようにして座る。（チーム）	・肯定側と否定側が向かい合う形になる。 ・2つの班を3人で囲むようにして座る。（チーム）
23分	《ディベートの流れ》 1 肯定側立論 3分 2 否定側立論 3分 3 質疑応答 各3分 ・ 否定側→肯定側へ ・ 肯定側→否定側へ 4 作戦タイム 2分 5 否定側最終弁論 2分 6 肯定側最終弁論 2分	主張「実力より、夢や希望を優先したほうがよい。」 根拠 ① 楽なほうへ逃げず、そこには夢も希望もないからがんばる力が生まれてこない。だから嫌なことがあってもやめたりする。 ② 今は力が足りなくても努力したら力がつく。夢が実現したら努力したことも後悔しない。 ③ もし、夢が実現しなくても自分で選んだ道だから後悔しない。また、努力したときのほうが気持ちよくくじけめがつけられる。	 司会：「ありがとうございます。それでは否定側の皆さんの立論に移ります。」 主張「夢や希望より、今の実力を考えて進路の選択をするべきだと主張します。」 根拠 ① 実力がないと行きたい高校へいけない。 ② 将来の夢があってもそこにつける実力がなくていけない。 ③ 夢や希望が大きすぎて、失敗したときのダメージは大きい。 ④ 希望する高校よりも自分の行ける学校に行ったほうがいい。 ⑤ 先に実力をつけて後から夢や希望を決めたほうが成功率が高い。	1 立論班 肯定・否定の各代表1チーム（3人）で行う。例えば、意見1人、根拠を2人で交互に発表するなど、生徒に工夫させる。 2 質疑応答 質問…質問作成班が行う。他のチームは聞いて欲しいことを紙に書いて渡すことができる。 応答…応答班が行う。事前に立論班、資料班との打ち合わせを行い準備をする。ただし、当日答えられないものについては他の班から	・司会、計時、記録を抜いて肯定・否定各1チームに編成する。 ・本人の意見をもとに編成。 ・各チーム内で小グループに分かれ、役割分担をする。

まとめ 10分	作戦タイム 2分間 最終弁論 各2分 フロ－ンシートにまとめる。 感想をまとめる。10分 資料プリントを読み合わせる。 ディベートを終えてのプリントを記入する。(5分) プリントを提出し、号令で終了。	司会：「時間になりましたので、作戦を終え、席に着いてください。それではこれから、最終弁論に入ります。時間はそれぞれ2分間ずつです。それでは、否定側の代表からどうぞ。」 司会：「否定側から、最終弁論をお願いします。」 司会：「それではこれですべての発表が終わりました。お疲れ様でした。計時、記録係さんもおつかれさま。」 教師：「では、これまでの討論を聞いて自分なりに考えたことをプリントにまとめてください。」 教師：「今日はみんなにディベートをやってもらったけど、どんなことを考えたでしょうか。しっかりプリントにまとめていてください。では、ここである有名なバスケットボールの選手の言葉をみんなにも伝えたいと思います。」 教師：「はい、これで今日の授業はおしまいです。最後にみんなに先生の伝えたかったメッセージが届いているかを知りたいので、この紙に感想をまとめてくれるかな。時間は○分です。では、静かにはじめてください。」 教師：「はい、これで授業は終わりです。これから、みんなが自分のためにいろいろなことに前向きに挑戦してくれることを期待しています。」	・記録、計時係りに拍手する。 ・マジック・ジョンソンのメッセージを読む。 ・ディベートを終えての感想をワークシートにまとめる。	・作戦タイムでは、席を立てても良い。 ・最終弁論に当たっているチームがまとめるように指示する。 ・否定側、肯定側の順序で行う。この場合も、1チーム3人で協力して行う。発表の仕方は生徒に工夫させる。	からお助けカードで助けることができる。 ・スーパードンペイザの先生方に子供たちの話し合いの手助けしてもらおう。 ・最終弁論後、通常は審判による判定を行うが今回は行わない。 ・ゆっくり静かな声で読み、一人一人が自分なりのイメージを膨らませられるように工夫する。
--------------------	---	--	--	---	---

6 授業の検証

(1) 準備段階

① 準備時間の確保

教師側の準備が遅れてしまったため、生徒に論題を提示するのが1週間前にしかできなかった。また、この週は7日に校内陸上競技大会を控え、生徒は同時進行で行事に取り組む形になった。

あわただしい中では、生徒もディベートの形を整えることに精一杯で、ディベートの利点である「思考する」ことが十分にさせられなかった。

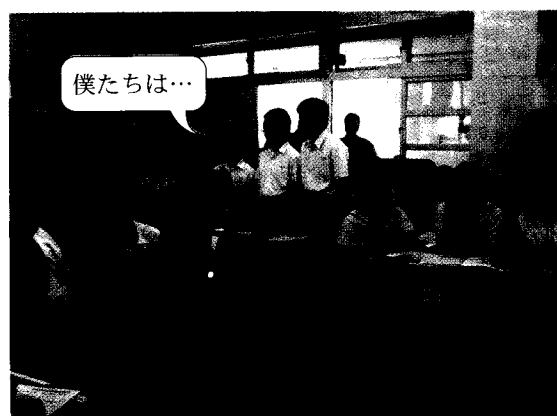
② 事前指導の徹底

生徒たちは、進路指導に対してまだ必要性を感じていない。そのため、授業に対する動機付けを工夫しなければならなかったが、十分にできなかった。そのため、教師と生徒で毎日連絡を取り合った班は、意欲も高まり、ディベートにも積極的に取り組む姿勢が見られた。しかし、進路について、「そのときになれば何とかなる」と答えていた生徒たちに関して、感想を見ると、「何のために（ディベートを）やったのかわからない。」「意見も変化しなかった。」など、この授業の目的さえつかませることができなかったように思う。意識の薄い生徒たちに、どう関心を持たせるか、いろいろな方法を検討したい。

③ ディベートの練習

ディベートは、形式が決まっているために、初めて取り組む生徒たちの戸惑いは大きい。特別活動では、ディベートをすることでこれまでの意識や価値観、認識などの変容を目的とする。そのためには、ディベートの形式に生徒が慣れておく必要がある。そうでない場合、生徒はディベートをするのに必死で、話し合われている内容について落ち着いて考え、自分の中に疑問や反論を持つことは難しいからである。

(2) ディベートの様子

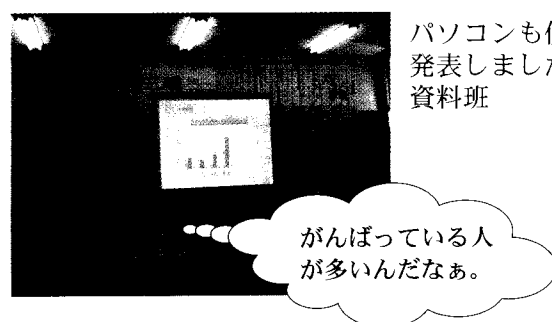


いよいよディベートの始まりです。

立論班



パソコンも使って発表しました。
資料班



みんな真剣に黒板の資料をチェック！



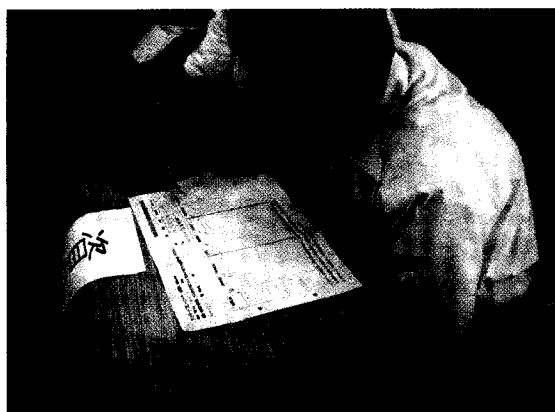
お助けカードも活躍中！

質問班



資料の中からヒントを探す。

応答班



みんなの言葉を一生懸命書き取るぞ。



フローシートをまとめています。



最終弁論はどう言おうか？ 全員で打ち合わせ。



話の流れを整理して、まとめを発表する最終弁論班。

終了直後の感想のなかから…

- ・あまり意味がわからなかった。(3人)
- ・一つの話し合いにこんなに細かく、資料などを作ったことがなかったので、いい勉強になりました。
- ・それぞれみんな意見がわれて、肯定・否定に分かれて意見を言い合ったので、よかったと思います。
- ・立論、資料、質問作成、応答、最終弁論の係りはそれぞれがんばってやったと思う。
- ・準備が楽しかった。
- ・討論会みたいですごかった。
- ・夢も希望も実力も、三つとも大事なんだなあと思った。
- ・(ディベートの方法が) 小学校のころと少し変わっていたので、難しかった。もっと練習したほうがいい。
- ・おもしろかった。
- ・なんか、(ディベートを) やっていたら、とてもとても早くてどこをやっているのかわかりませんでした。
- ・実力と夢や希望どちらが、ではなく、両方そろわなければいけないということ。
- ・みんないろんな資料を作ってすごいと思った。みんなでちゃんと考えることができた。
- ・自分たちが肯定側の質問に答えることができなくて、ショックでした。
- ・どちらも正しいからとても迷ったし、難しかった。
- ・なかなか、質問作るのは難しかった。でも、いつもと違う授業がやれてよかったと思う。相手の考えがよくわかった。頭を使いすぎて、疲れた。
- ・私は記録係で、みんなが言ったことなどを記録していましたが、聞き取るのがとても難しかった。

(3) 授業の検証

授業直後と、二週間後のアンケートの結果から今回の授業の検証をする。

アンケートの実施方法

①授業の終了直前に、「ディベートを終えて」のアンケート用紙を配布。記入する時間がなかったため、翌日回収した。しかし、全員分を回収することができず、集まったのは25人分であった。

②18日の朝の会で、「ディベートを振り返って」のアンケートを行った。欠席者3人をのぞく、35人分を回収した。

3 ディベート後、進路について何か考えたか？

	男子	女子	合計
考えた	3人	9人	12人
考えなかった	16人	7人	23人
無回答	0人	0人	0人

授業終了後、進路について何か考えたことがあるか？と聞いたところ、男子3人、女子9人の生徒が考えたと答えている。この生徒たちを見てみると、5月の段階で、つきたい職業が決まっている生徒が9人(男2、女7)おり、未定が2人(男女各1人)である。また、親と進路について話し合い、意見が一致している生徒が2人、本人に任されている生徒が8人、まだ話し合ったことがない生徒が1人であった。この生徒たちは、クラスの中では進路に対する意識の高いグループであった。

5月の調査で、職業に対して関心の薄いグループを見てみると、全員特に何も考えなかったと答えている。この結果に対しては、教師の側のディベートに対する動機付けがなされなかったことが大きな原因となっていると考えられる。

進路について少し考えたことのある生徒たちは、ディベートを経験した後の変化が見られる。たとえば、5月には、進路に対して知りたいことがあるか？と質問しても、男子は全員特になし。女子は、わずか3名が以下のような質問をした。

- ・進路(という言葉自体)がどういうものなのかよくわからない。
- ・(自分の)将来の夢にあっているかどうか。
- ・どのくらい勉強するのか。

今回、自由記述の欄を見てみると、男子が3人、女子が9人になった。(その中で、前回も書き込みをした女子が2人。7人増えている。)内容を見てみると、

- (男子)
 - ・ディベートをやって高校の進学についてわかった。
 - ・このままで行きたい高校へいけるか。
 - ・どここの高校へ進学するか。
- (女子)
 - ・進路を決めることは難しいな、と思った。
 - ・進路、どうしようかな。
 - ・今の成績でいけるか。
 - ・どのくらいの成績でいけるか。
 - ・どここの高校へ行こうか。
 - ・今の実力では、どこをがんばればよいか。
 - ・自分に向いている(行きたい)高校について。
 - ・もっとがんばらないと高校いけんよ！

となっていた。ディベートを通して、これまでとは違った意識を進路に対してもつようになったと考えられる。

1 ディベートのやり方がわかったか。

わかった	24人
わからなかった	1人
無回答	0人

これまでにディベートを経験したことのある生徒が9人いたが、残りの生徒ははじめての挑戦であった。しかし、ほとんどの生徒がやり方がわかったと答えているので、次回のディベートにつなげていきたい。

2 ディベートの後で、考え方が変わったか？

変化した	10人
変化なし	13人
無回答	2人

ディベートの後で変わったことは、

(男子)

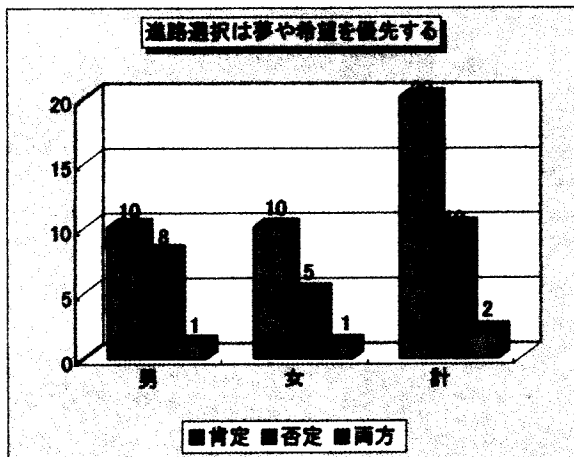
- ・受験の気持ちがわかった。
- ・夢や希望と実力は、持っていないとだめだということ。

(女子)

- ・夢をまっすぐにあきらめない力もあるということがわかった。
- ・進路はもっと大変なことなんだなと思った。
- ・進路についてもっと考えようと思った。
- ・高校に行くのはこんなに難しいことなんだと(思った)。
- ・夢を優先するのもいいかなと思った。
- ・実力よりも夢や希望の方が優先だと自信が持てた。
- ・もっといろいろ考えようと思った。
- ・相手の立論を聞いて、私たち(否定側)にも当てはまった。

4 あなたは「進路の選択は夢や希望を優先すべきである」について肯定ですか、否定ですか。

ディベート終了後、改めて論題について一人ひとりに聞いてみた。すると、男子は10人が肯定、8人が否定、1人はどちらともいえないと答えた。女子のほうは、10人が肯定、5人が否定、1人がどちらともいえないと答えた。どちらも選べないと答えた2人の生徒の他にも、どちらかを選ぶのは難しいと思っている生徒はいるだろうと考えられる。しかし、アンケートの質問が「あなたはどちらの立場ですか？」と、なっているので自分の心の中で比重の重いほうを選んだのだろう。この2人の生徒は、教師が問い詰めてもやはりどちらも選べないと答えた。生徒の中で、最初に出てこなかった意見である。人数は少ないが、この生徒たちは、ディベートを通して意見の変容を強く意識した生徒たちであるといえる。



5 実際にディベートを通して印象に残っていることや言葉は何ですか？

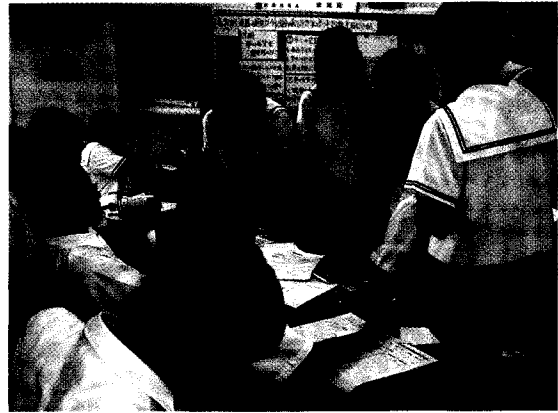
男子

- ・ 肯定側がパソコンを使って資料を作ったこと。
- ・ 肯定派の立論で「実力は後からでもつけられる。」
- ・ 中学浪人。
- ・ 実力と夢や希望、二つとも大切だということがわかった。
- ・ ディベートの準備などは大変だったけど、最後には納得した。自分たちはまとめきれなかったけど、楽しくできた気がする。

女子

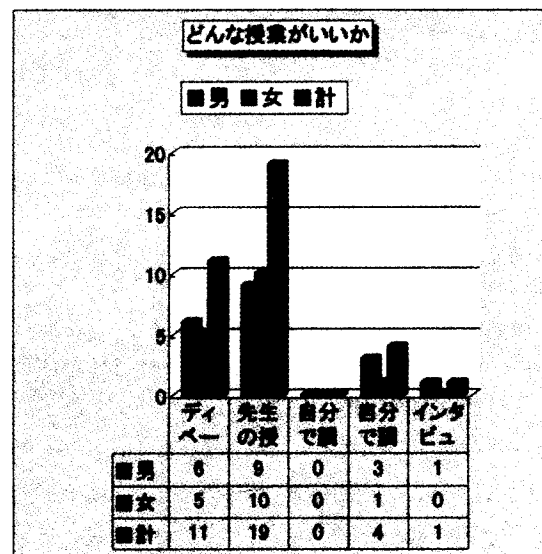
- ・ みんながちゃんと表を作ってわかりやすく説明や意見を言ったこと。
- ・ 発表するのに時間が決められていること。
- ・ 時間が思ったより短かったし、「この資料見てください」って言っても資料が出てこなかったときは「どうしよう」ととてもあわてました。
- ・ パソコンでグラフを見たこと。

- ・ 最後に配られたプリント。
- ・ 夢や希望それと実力どちらも大事だということ。
- ・ 思ったよりあせった。時間とか計っているから。
- ・ 今の実力も、希望も両方大事。



最終弁論の前の打ち合わせ。

6 ディベートと他の方法ではどちらが進路についてより深く考えられる（または考えられそう）ですか？ 1つに○をつけてください。



- ア ディベート。
 イ 先生の授業。
 ウ 自分で調べて発表する。
 エ 自分で調べて新聞にする。
 オ 働いている人にインタビューしたことをまとめて発表する。

の中から選択してもらったところ上のようになった。

ディベートに挑戦したいと答えた生徒が11人（男子6人、女子5人）、先生の授業19人（男子9人、女子10人）、自分で調べて発表する0人、自分で調べて新聞を作る4人（男子3人、女子1人）、働いている

人にインタビューに行くが男子1人であった。このグラフと、生徒の感想をあわせてみるとディベートに積極的に取り組み、自分なりにわかったことや、気持ちの変化があった、また、気持ちに変化はなくても何かできるようになったことがあると答えた生徒たちはディベートを楽しいと言ひ、また挑戦したいと答えている。しかし、ディベートの準備に積極的でなく、話している内容もあまり理解できなかった生徒たちは「先生が教えてくれる授業（のような進路指導）」がいいと答えている。



計時係もがんばった。

VI 成果と課題

進路指導のディベートの成果と課題

視点

- ① 生徒の認識を揺さぶり、心の変容を促すような授業内容であったか。
- ② 一方的な見方でなく、多面的な見方（複眼的思考）が育ったか。
- ③ 相互理解、自己理解が深まったか。
- ④ この授業を通して、進路や生き方に関するどのような認識が深まり、広がったのか。

まず、論題の設定が安易であったため、生き方を考えさせる内容に結びつけることが難しかった。生徒たちに「高校へ行くことは難しそうだ」と目の前を見せるのではなく、人生について考え、思いを馳せることのできるような論題の設定をしなければならなかった。

多面的な見方は、すでにディベートを経験したことのある生徒、または書く作業の早い生徒たちは、相手の意見をしっかり聞く余裕があった。互いに、相手の意見を聞きあう中で、「相手の立論は私たちにも当てはまった。」という感想もあった。

この授業1回きりでは、生徒たちの進路や生き方に関する認識を深めたり広げたりすることは難しい。だが、せめて学期に1回ずつでも、進路や生き方をテーマにしたディベートを組むことで生徒の中に複眼的な思考を育て、自分の生き方を模索していこうとする態度は育てられると考える。

この授業を振り返って、課題をあげると次のようになる。

① 論題の設定の仕方を研究する必要がある。

生徒が今持っている価値観を揺さぶる、インパクトのある論題を設定するにはどうしたらよいのかを研究したい。

② 生徒の動機付けの仕方

どう生徒たちに働きかけたら、「やらされている」ではなく、「やりたい」という自分自身の活動になるのか。動機付けには内的、外的、達成動機などいくつかあるようなのでそれぞれどのような場合に動機付けが促進されるのか理論面を学びたい。

③ 時間をどう工夫して生み出すか。

生徒たちがもっとディベートに慣れることで、下準備の時間は今回よりは短縮できると考えられる。だが、ディベートが根拠を基にした話し合いである以上、下準備の時間はどうしても確保しなければならない。教科や道徳との関連を図り、今後予定通り実践できるか検証を続ける。

④ 相互理解、自己理解を深めるための手立て。

ディベートで互いに意見を交換し合い、自分自身の意見の変容も体験することで相互理解、自己理解は多少深まったと考えられる。しかし生徒にもっと強く意識させ、その変化の過程が記録として残る方法を工夫しなければならない。ワークシート、ファイル作成、事後指導の方法などを工夫することでもっと生徒に意識させることができる。

⑤ 自己評価

ディベートの評価は、教師が行うものではないと考える。人の心の変容で外部から観察でわかることなど氷山の一角に過ぎないと思えるからだ。自分で、自分の変容を認識するかしらないか。自分自身の変化のどの面を価値あるものととらえるか。自己評価の方法や、視点を育てる必要がある。教科で自己評価を行うことがあるが、生徒の性格によって自分に甘かったり、厳しすぎたりする。自己評価の目的を理解させ、適切な自己評価ができるように生徒を指導したい。

ディベートを通しての副次的な効果

今回は、初めて学級でディベートに取り組むため、「やり方がわかればよい」と考えていた。しかし、生徒の感想を読むと一人ひとりががんばった分、いろいろな成果を得たようである。

《生徒の感想》

- ・発表などをちょっとがんばれるようになった。(男子)
- ・自分の意見を短い時間で言えるようになったと思う。(女子)
- ・思ったことをちょっとは言えるようになった。
- ・発表の仕方がわかり、意見も言えるようになった。
- ・めったにみんなの前でしゃべらないから緊張したけ

どよかった。資料作りも遅くまでかかったけどよかった。

- ・パソコンがちょっと使えた。(男子)
- ・パソコンに強くなった。(男子)
- ・インターネットを使った。
- ・最初は意見とか、書き写すのとかたいへんだっただけど、やっているうちに聞き取るのができるようになっていた。(女子)
- ・記録だったから、みんなの思っていることをちゃんと聞くことができた。(女子)
- ・資料の整理。
- ・意見をまとめるのは大変だった。でも、しっかりできてよかった。
- ・質問ででたことをしっかり紙に書き写し、理解することができた。

学級活動の副次的な効果

- ・みんながちゃんと表を作ってわかりやすく説明や意見を言ったこと。(女子)
- ・知らない人がたくさんいて、発表するときあがったけど、他の人たちががんばっていたから、クラスに少しまとまりができた。

1 研究を終えるにあたって

「人生は邂逅である。」特別活動の研修で出会った言葉である。この半年間、たくさんの人や言葉と出会ってここまでできた。考えてみると、研究テーマである生き方を考えることが一番必要だったのは私自身であった。何のためにこの職業についたのか。生徒と日々関わっていく中で私は何を生徒に伝えたいのか。これまでの自分の言動を思い返しながら、ひたすら反省する毎日だったように思う。私が今抱えている問題意識や、授業や生徒との関わり方に対する課題はこの機会が与えられたことによって自覚した部分が多く、感謝している。

このような研修の環境を整え、機会を与えてくださった宜野湾市教育委員会の方々、また快く送り出してくださった嘉数中学校の上原正敬校長をはじめ職員のみなさん、ありがとうございました。特に学級をまとめ、こまやかな気配りで協力してくださった中村なをみ先生ありがとうございました。

また、いつも励まし、支えてくれた研究教員の儀間先生、比嘉先生、コンピューターでお世話になった比嘉さんありがとうございました。

手探りの授業に適切な助言を与えてくださった中頭教育事務所指導主事の松田先生、私のつたない資料を何度も読み返し、示唆を与え、人との出会いの場をたくさん設定してくださった研究所の新垣英司先生本当にお世話になりました。ありがとうございました。

2 主な参考文献

- ・沖縄県教育委員会『学校における指導の努力点』(平成12年度) 2000年。
- ・仙崎 武・野々村 新・渡辺三枝子・菊池武利編『入門 進路 指導・相談』福村出版, 2000年。
- ・森嶋昭伸・鹿島研之助編著『新中学校教育課程講座 特別活動』ぎょうせい, 2000年。
- ・北岡俊明『ディベートがうまくなる法—議論・説得・交渉に勝つための技術—』PHP文庫, 1997年。
- ・杉浦正和・和井田清司編著『授業が変わるディベート術!』国土社, 1998年。
- ・魚住忠久編著『ディベート学習の考え方・進め方』黎明書房, 1997年。
- ・宮本美沙子『やる気の心理学』創元社, 1981年。
- ・奥田眞丈監修・瀬戸眞編集『教職研修 実践ハンドブック No. 3 児童・生徒の「生き方」指導の展開』教育開発研究所, 1994年。
- ・菱村幸彦監修・有園格編集『教職研修 変化の時代の学校教育全過程 No. 5 変化の時代の学力観』教育開発研究所, 1996年。

3 資料

(生徒に配布したもの)

ディベート用資料※参考にしてください。

沖縄県事由別退学者数推移(平成8年度～10年度まで)

	平成8年度	平成9年度	平成10年度
学業不振	142 8.4%	174 9.8%	120 6.8%
病気・けが 死亡	38 2.2%	54 3.0%	31 1.7%
経済的理由	87 5.1%	61 3.4%	58 3.3%
問題行動	12 0.7%	28 1.6%	35 2.0%
進路変更	923 54.6%	979 54.9%	1029 57.9%
家庭の事情	54 3.2%	65 3.6%	71 4.0%
学校生活 学業不適応	368 21.8%	336 18.8%	389 21.9%
その他	67 4.0%	86 4.8%	43 2.4%
合計	1691 100%	1783 100%	1776 100%

沖縄県教育委員会 平成12年度 学校教育における指導の努力点より

※中途退学者の半数以上が1年生である。

資料 小学校・中学校における進路指導の系統

学年	自己理解	進路計画・選択	職業観・勉学観	進路情報
小・低学年	大きくなったら何になりたいか		家族の仕事を知る	
	自分のよさを知る			
小・中学年	将来への夢		身近にある職業を知る	
	自分の特技や得意なものに気づく			
小・高学年	将来つきたい職業		いろいろな職業を知る	
	自分の長所を生かす (集団との関わりの中で)			
中・一年生	自分を知る	将来の夢	働く人々	
		将来の希望と進路指導		
中・二年生			働くことと学ぶこと	
			職業の世界	
	適性と進路		学ぶための制度と機会	
中・三年生		進路の選択に備えて		
		進路の決定		
			将来の準備	

※那覇市立与儀小学校 石川 博久「小学校における進路指導 夢や希望を育む学級活動の指導」実践報告書より

ディベートを取り入れた年間指導計画

月	学 校 行 事	PTA	特 別 活 動	道 徳	教 科	備考・資料
4月	7日 始業式 20日 家庭訪問		学級開き	挨拶について 笑いの種類	・遠くでっかい世界	挨拶の語源
5月	1日 家庭訪問 2日 社会見学 11日 知能検査 12日 標準学力検査 19・20日 中間テスト 22日 学級意見発表会 24日 マルチ検査	12日 学級PTA	学級目標・個人目標 わたしはこう生きたい	・生きる～モンゴルの現状～		講演会・G. T. S、島袋さん
6月	2日 学級意見発表会 7日 学年意見発表会 16日 中頭地区中体連（～18日） 22日 期末テスト① 27・28日 期末テスト		職業と産業	21日 平和集会		23日 慰霊の日
7月	7日 校内陸上大会 13日・14日・17日 学期末三者面談 19日 終業式		ディベート1			
9月	1日 始業式 9日 市内小中陸上 28日 校内合唱コンクール		移り変わる職業の世界	努力すること 家族は人との出会い 字のないはがき わたしを作ったもの		
10月	5日・6日 地区陸上 10・11日 中間テスト 23日 教育相談週間（～27日）		さまざまな勉学への道 文化祭準備	ピンチはチャンス		指導案あり
11月	8日 文化祭試演 11日 文化祭前日準備 12日 文化祭 24日 期末テスト① 29日 避難訓練		エ イ ズ 学 習			
12月	4日・5日 期末テスト 6日 芸術鑑賞会 13日 生徒会立会い演説会 19日・20日・21日 学期末三者面談 25日 終業式			世界エイズデー（1日）		
1月	9日 3学期始業式 10日 達成度テスト 15日 校内読書週間（19日） 22日 教育相談週間（～26日）	19日 修学旅行保護者説明会	自分の適性を考える わたしの成長 修学旅行に向けて			
2月	13日 修学旅行結団式 14日 修学旅行（～17日） 22日 学年末テスト（～26・27日）		自分の特色と進路計画	死ぬということ	バラバラ落ちる雨よ夕焼け	老人性痴呆症 介護保険制度 デス・エデュケーション
3月	3日 親子ふれあい作業 6日 お別れ球技大会 15日 卒業式試演 16日 卒業式 23日 終了式		進路計画の検討 ディベート2	責任・無責任	アジアの働く子供たち	

※計画立案が遅れたため、1学期についてはほとんど実施できなかった。